東京文学地図

槌田満文

東京文学地図

槌田満文

槌田満文（つちだ みつふみ）

大正15年（1926）12月，東京浅草生まれ
慶応義塾大学国文科卒業
現在・東京新聞婦人家庭部勤務
著　書＝「名作365日」（河出書房）
　　「明治東京歳時記」（青蛙房）
現住所＝東京都杉並区高円寺北3—
　　31—18わかな荘

東京文学地図

著　者＝槌田満文
挿　画＝堀　潔
発行者＝矢牧一宏
発行所＝株式会社　都市出版社
　　東京都渋谷区代々木四—二二—十三
　　代々木シャトー一〇三号
印　刷＝有限会社　共　信　社
　　昭和四十五年八月二十日＝印刷
　　昭和四十五年九月一日＝初版発行
定　価＝九〇〇円
書籍コード　五三〇四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

はじめに——9
東京駅・丸の内——19
皇居——31
日比谷公園——43
帝劇・帝国ホテル——59
有楽町——73
銀座——83
新橋——101
築地・佃島——111
歌舞伎座——125
日本橋——135
大川端——147
深川・洲崎——161

向島・隅田公園——171
玉の井・百花園——183
浅草——191
吉原——207
上野——217
本郷・湯島——231
神田——243
後楽園・植物園——255
池袋——265
早稲田・神楽坂——275
靖国神社——285
番町・四谷——295
新宿——305

渋谷——315
代々木・青山——325
六本木・赤坂・霞ケ関——339
愛宕山・増上寺・東京タワー——355
三田・高輪——363
羽田空港——371
隅田川十二橋——381

挿画

堀　潔

東京文学地図

槌田満文著

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

「私はこの巨大な都会を縦横に走る、拡大してやまない〝高速道路〟網で、迷い子になってしまう。延びてやまない地下鉄新線のなかで、いったい、どこにいるのかわからなくなる。知っているはずの町をさがすと、いつのまにか、ブルドーザーの下敷になって姿を消してしまっている。……」これは古い東京をよく知っているフランスのジャーナリスト、ロベール・ギランが、二年半ぶりに見た東京の変貌に嘆声をもらした『第三の大国日本』（昭和四四年、井上勇訳）の一節ですが、東京に住むわれわれも、まったく同じ実感を持っている事実に気づくとき、驚きを新たにしないわけにはゆきません。

大正の震災、昭和の戦災、戦後のオリンピックと激しい変化を余儀なくされた東京に、江戸や明治のたたずまいが残っているとすれば、それはほとんど偶然に近いといってよいでしょう。オリンピックの前後数年間に東京の景観を一変させてしまった高速道路、複雑多岐に伸びた地下鉄網、立体的に再開発された新宿、霞が関ビルに始まる超高層化など、ガムシャラなほどの近代化、工業化、都市化は、これをエネルギッシュというべきなのでしょうか、ヒステリックとみるべきなのでしょうか。

しかしこうした激変にさらされながら、東京人の生活の中に動かないものがあることも否定できない事実です。戦後フランスに住みつき、昭和四十一年（一九六六）に十一年ぶりで帰国した森有正のエッセイ『滞日雑感』（昭和四一年）は「今度かえってみて、東京が、確かにその外面的な姿は個々の点で変化したけれども、全体としては東京固有の美しさをもって復興しているの

に驚いた」と述べています。「東京の地形と自然とその住民たち、こういう動かないものが、戦後の狂乱の中に、少しずつ一つの秩序と形をとり始めているということだ。高速道路が張りめぐらされ、高層建築が林立し、他方小さい木造とセメントの家が蝟集し、混乱と無秩序と空疎さそのもののようなこのアモルフな大都市の中に、少しずつだが、東京の住民たちの生活のリズムがあらわれ始めている。私はそれを間違いなく感じた。……」

いっしょに暮らしている子供の成長に、親は案外気づかないものです。東京の中の変わったもの、動かないものを正確につかむには、外国人や在外日本人のような客観的な目で、東京の変化と持続の歴史を見直す必要があるのではないでしょうか。

□

はげしく変貌する東京のなかには、浅瀬の波のように瞬時もとどまっていない銀座という一角があるかと思うと、深淵のようによどみながらも目に見えないうちに動いている浅草という一隅も存在します。また、戦前の神楽坂や人形町の繁華が夢のように消え去ったのにひきかえ、戦後の池袋や新宿の発展は思いもかけなかったほどのめざましさですが、激流のなかのうず潮も、このように絶えず位置を換えるもののようです。

明治以後大正、昭和にかけて、赤坂から青山を経て渋谷へ、麹町から四谷を経て新宿へ、本郷

から白山を経て巣鴨へと、繁華街や盛り場が遠心的な動きを示してきたことからでも想像できるように、世相を端的に示すうず潮の位置が、時の流れとともに拡がってきたことは、たとえば明治七年（一八七四）に発刊された服部誠一著『東京新繁昌記』と、昭和二十九年（一九五四）に刊行された井上友一郎編『東京通信』の項目をくらべてみてもあきらかです。

『東京新繁昌記』によれば、「京橋煉化石」「築地異人館」「新橋鉄道」「万世橋」「芝金杉瓦斯会社」などが、文明開化の象徴であったと思われますが、それから八十年後の『東京通信』になると、「立正佼成会」「戸山アパート街」「羽田空港」「砧撮影所」「ワシントン・ハイツ」などに、もっともよく戦後の世相が反映しています。

共通する項目は、前者の「公園上野」と後者の「上野の杜」、前者の「招魂社」と後者の「靖国神社」のわずか二つにすぎません。しかしよく考えてみれば、明治の「新橋鉄道」は、昭和の「羽田空港」であり、維新後の「築地異人館」は、終戦後の「ワシントン・ハイツ」に他ならないともいえるでしょう。ただ全般的にみて、時代の尖端を示す地点が大きく拡がっているところに、明治から昭和までの東京の膨脹のあとが、おのずから示されているように思われます。

しかし、安保騒動の昭和三十五年（一九六〇）にまとめられた朝日新聞社編『東京だより』や昭和三十九年（一九六四）に開かれた東京オリンピックのルポで終わる開高健著『ずばり東京』をみると、空間的な拡大ばかりでなく、東京の質的変化を感じないわけにはいきません。

『東京だより』では「東京タワー」「うたごえの店」「警視庁の運転免許試験場」「池袋のスケー

トセンター」「浅草の『新世界』」などの章に、新しい東京風物がとらえられています。それが『ずばり東京』になると「空も水も詩もない日本橋」「これが深夜喫茶だ」「ポンコツ横丁に哀歓あり」「練馬のお百姓大尽」「憂鬱な交通裁判所」「練馬鑑別所と多摩少年院」「マンション族の素顔」「狂騒ジェット機への怒り」といった項目をみてもわかるように、激動の世相の中で東京そのものが脱皮の苦しみに耐えながら変身しつづけているさまが、生々しく描き出されているのです。

西鶴が試みた一連の風俗見聞録にならって「この都を主人公にして一つの小説を書こうとも考えて探訪しつづけてきた」という著者は、『ずばり東京』に「昭和著聞集」というサブタイトルをつけていますが、そこには「国のすべての要素が集結している」東京を描くことによって、凝縮された現代の日本そのものを描き出そうとする姿勢がうかがわれます。

□

寺門静軒の『江戸繁昌記』の流れを汲む服部誠一の『東京新繁昌記』は、当時のベストセラーとなった書物でした。以来、萩原乙彦の『東京開化繁昌誌』（明治七年）伊藤銀月の『最新東京繁昌記』（明治三六年）大町桂月の『東京遊行記』（明治三九年）渋川玄耳の『東京見物』（明治四〇年）児玉花外の『東京印象記』（明治四四年）山口孤剣の『東京新繁昌記』（大正七年）水島

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com